



TITLE:

ブルック・ファーム

AUTHOR(S):

穂積, 文雄

---

CITATION:

穂積, 文雄. ブルック・ファーム. 経済論叢 1962, 90(2): 88-108

ISSUE DATE:

1962-08

URL:

<https://doi.org/10.14989/132898>

RIGHT:

# 經濟論叢

## 第九十卷 第二號

---

自由主義經濟を守る道……………伊 藤 寛 1

ブルック・ファーム……………穂 積 文 雄 16

日本海運業における減価償却の

生成過程（その三）……………高 寺 貞 男 37

司馬遷の商業観……………桑 田 幸 三 58

### 書 評

井上 忠 勝 著

『アメリカ經濟史』……………三 島 康 雄 70

---

昭和三十七年八月

京都大學經濟學會

## ブルック・ファーム

穂 積 文 雄

## 八

ブルック・ファームはファランジュ化した。だが、ブルック・ファームは、そうすることによって、はたして、所期の目的を達成することに成功したであらうか。

もちろん、成功したとみるものも、いる。つぎに引くところのごときは、まさに、その例証となすに、たるものであらう。

……われわれは、ずいぶん、農業の改善をはたした。われわれは、いくつかのしごと (trades) の機械のために、六フィートと二〇フィートのひろさのしごと (workshop) を一軒たてた。それらの機械のいくつかは、すでに、運転している。そして、われわれは、目下、ひとつのファランステリー (Phalanstery)、すなわち、共同住宅 (Unitary dwelling) の一部 (ながき、一七五フィート (は、ば)、四〇フィート) を建設中である。われわれの最初の目的は、その性格と信念よりして、われわれが従事している実験を支援する能力をそなえているひとたちを、あつめて、そのひとたちに、便宜・快適な住居を、最小の支出で提供することにある。われわれは、すでに、共同世帯 (associated household) による特別の利益を享受するところ、すくなくないが、

それでも、なお、この目的のために、経済には、細心の注意が、はらわれている。それでも、なお、過渡的な社会にとっては、そして、比較的真実な期間の使用のためには、社会的な建築物は、文明化した建築術の欠点をこらむることを、まぬがれることができない。われわれのフランク스가、充分大きくなり、そして、労働のシリアルな組織 (Serial organization of labor) と総合教育 (Unitary education) という、その偉大な目的が、ある程度完遂せられたるあかつきにおいて、はじめて、われわれは、それにふさわしい、偉容と耐久性をそなえたフランクステリーを建設することが、できるであろう<sup>1)</sup>。

これをよむと、ブルック・ファームのフランクジュ化は、うまくいつているように、みえる。それは、着々と、成果をあげているように、おもえる。期待はうらぎられなかつたと、かんがえられるかのごとくである。そして、それをかいたひとにとっては、それは、まったく、そのとおりであつたのかも、しれない。わたくしは、かならずしも、それを、うたがおうとするものではない。だが、しかし、だからといって、わたくしは、それを、そのままに、うけとることを、ためらわないものでもない。なぜかなれば、まず、この文は、当事者のものしたるものである。そして、由来、当事者はまようものである。それも、希望的観測におちいりがちのものである。しかも、そればかりではない。この文には、あとに、資金募集のうたえがつづく。そのことは、この文に宣伝的なおおいを感じしめないでやむであろうか。そして、宣伝的なおおいのある文を、そのままに、うけとることを、ためらわないで、いられるであろうか。はたして、われわれは、つぎのごとき記述をみいだすことになる。

……おとなになったものが、このような(訳者注、フリーエリズムをさす)ターミノロジにとりつかれたということは、信じがたいところである。だが、かれら(訳者注、ブルック・ファーマーズをさす)はとりつかれたのである。それは、事実なのである。

さて、実行する段になると、ひとりのひとが、今日はポテト<sup>1</sup>ほりのグループにはいる。そして、明日は洗濯のグループにはいる。そのわけは、エマースンがこういつている。「レディーたちは洗濯日にかぜをひいた。そして、とのがたの羊かいたちは布をほすべし、との指令が出た。その指令を、かれらは、いわれたとおりに勵行した」。

これらのすべては、なんら、もうけを、もたらさなかった<sup>2</sup>。

だが、この文のそこに、悪意をよみとる、ひとがあるかも知れない。その行間に、冷笑をうかがう、ひとがあるかも知れない。わたくしは、それを、かならずしも、むりであるとは、おもわない。それでは、と、ひとはいうであろう。この文も、また、そのままには、うけとるわけにはゆかないのではないかと。そう、いわれれば、そのとおりであろう。たしかに、そのとおりであろう。わたくしは、それに対して、あえて異議をとなえるつもりは、ない。だが、だからといって、さきの、成功したとみるみかたを、そのままに、うけとるわけには、いかない。それをそのまま、みとめることはできない。すくなくとも、わたくしには、できない。そういうと、それは、なぜかと、いぶかるひとがあるであろう。いな、あるにちがいない。そこで、そのひとたちに対して、わたくしは、その理由をしめす義務を感じる。その義務感からわたくしみずからを解放するために、わたくしは、つぎのとき引用を、なさねばならない。

……わたくしのいた年のおわりころ、フリーエリズムがメンバーたちによって論議されるようになってきた。会合が、たびたび、ハイブのながい食堂でおこなわれた。われわれ少年は、それらのなりゆきに、ほとんど関心をもたなかった。しかし、われわれも、フリーエーの学説がとりいれられねばならないということを、理解した。どの点までとりいれられねばならないかは、わたくしは、その当時、しらなかった。いまでも、しらない。その後、まもなく、そのうごきが、はじまった。非常に不愉快な

ひとびとが幾人か登場してきた。かれらは、われわれ少年たちには、不平な技術者のように、おもわれた。かれらは、すぐ、じぶんたちだけで、かたまって、グループをつくった。<sup>グループ</sup>昼食の後、かれらは、よく、大きななやの内に、いっしょに、あつまって、かけごとをしたものである。そして、ほかのひとたちが、とおりすぎると、意地わるどもは、そのひとたちを、うさんくさそうに、にらみつけて、「貴族め……」と、つぶやいたものである。みんな、かれらが、じぶんらは教養や、<sup>インテリゲンチヤ</sup>そだちがおとっているということを、知っていることから、くるのである。それでも、なお、メンバーの間には、友愛の情が存していた。そして、うけいれられ、吸収されるためには、学者か紳士でなければならぬという必要は、なかった。

……このころ、有名な、社会主義者のアルバート・ブリスベーンが、よく、このコミュニチーに、たずねてきた。そして、ひとびとを、激励したものである。でも、わかい連中は、あまり、ついてゆかなかった。かれについての、ひとつのものがたりが、おこなわれたものである。かれと、その他のひとたちが、戸外で、月光の下・草の上に、ねころんでいた。「なんて、うつくしい世界よ！　なんと、こうごうしい月よ！」と、ひとりがいった。「みじめな世界よ！　いとわしい月よ！」これが、あわれなブリスベーンの返事であった。……<sup>3)</sup>

これは、当時、ブルック・ファームに学んだアーサー・サムナーが一八九四年、ニュー・イングランド、マガジーンによせた「一少年のブルック・ファームのおもいで」の中の一節である。少年の、それも、半世紀もむかしの、おもいででは、満足できぬ、と、いうひとが、あるかもしれない。それなら、そういう、ひとには、わたくしは、一八四四年六月二日マサチューセッツのカンバース・フランシス (Convers Frances) というひとが、ロンドンにいるテオドル・パーカーというひとによせた、書信の一節をしめそう。それには、つぎのごとく、しるされている。

……ジョージ・リブレイは、ますます、よく、やっている——すくなくとも、かれは、そう、つたえられている。コミュニ

チーは多くの家族……機械等が加はり、……さらに、いろいろのしごとが導入せられて、大に拡張された。かれらは、できるだけ、フリーエーの体制に到達しようと、つとめている。それは、わかる。わたくしは、このひとびとに対して大いに敬意を表する。かれらは、ともかく、労働と人生の真理にむかって、いくばくかのこころみ、を、しようとしており、かつ、かれらが真実と信ずるところのものを、生きぬこうと、している。だが、わたくしは、(ふるい偏見から生ずるとはおもうが)、フリーエーのもののような計画には、すべて、不信をいだく。その計画は、「さあ、機械的設備と進歩的なシリーズによって、完全な形態の社会を建設するんだ」と、いうように、みえる。それは、あまりにも、数学と機械学を自由意志に適用するように、みえる。それは、あまりにも、人間を、行為の対角線の二乗は、性質の底辺の二乗の二倍と教育の垂線の和にひとし、(the square of the oblique diagonal of conduct shall be equal to the two squares of the base of nature, & the perpendicular of education) というように、とりあつかうように、みえる。……神は無理な・人為的な生活方式——それは、理由はわからないが、非常にしばしば、われわれを圧迫する——から、われわれを解放しようとする、いかなるく、わだてをも、促進したまう。……4)

それに、ただ、これだけではない。おなじようなものを、わたくしは、まだ、いくらでも、引用することが、できる。たとえ、一八四四年九月一日、マリアンヌ・ドワイト嬢よりフランク・ドワイト氏への書信のなかから、わたくしは、つぎのごとき一節を引くことができる。

……ああ！ すべての変化と失望に対して、意気を沮喪することなく、万事うまく行くという愉快な信頼をもって、対する覚悟をもちたい。——否、現在、万事うまく行っているんだ！ と感じる事ができれば、さらに、よい。だが、万事うまく行つては、いない、という感じがする。おそろく、そのためだと、おもう。わたくしは、なやむ。……5)

しかしながら、右に引いた二つのものに対しては、あまりに抽象的だ、と、いうひと、あるかもしれない。そ

う、いわれるひとには、わたくしは、さらに、おなじマリアン嬢が、一八四五年二月七日、ノンナ・パーズンズによせた書信の一節をしめしたい。そこには、つぎのごとく、のべられている。

……あなたは危機のことをおっしゃる——これは、わたくしの、こまかにかくことのできない問題の一つです。そして、わたくしのもうしますことは、なにごとによらず、みな、秘密にねがいます (will be confidential)。わたくしたちは、われわれにとって最大の危機に、直面しています。そう、わたくしは信じます——もし、わたくしたちが、それを、のりきれば、わたくしたちは、おそらく、安全にすすみましょう。そして、二度と、危機とたたかわねばならぬということは、ないでしょう。わたくしは、困難はつぎの点にある、と、おもいます。——わたくしたちのなかに、わたくしたちの事業を指揮する事業家がいなかった。——わたくしたちは、最初から、ほんとうの商売 (strictly business transaction) をしたことはない。そして、わたくしたちのなかで、いくらか商才のあるひとたちは、このあやまりをみて、これまでわたくしたちがしてきたように、すすみつつけることは、できない、と、感じています。そのひとたちは、経営方法が変更せられないなら、やめようと、しています。なんとすれば、かれらには、ここで、過去および現在のしくみの下では、成功のみこみがないからです。重要なことは、一人か、二人か、または、三人かの個人のはなしあい、おこなわれております。そして、そのほかのひとは、いずれも、つんぼさじきに、おかれています (kept in the dark) (すこし、いいすぎかも、しれませんが)。そして、いまでは、そのようなことは、もはや、これ以上、つづけてはなりません。——わたくしたちのなかのわかいひとたちは、「研究会」 (Equality Meeting) をはじめました。そして、そのような手段がとられるにいたった事態は、かなしいことで、なければなりません。わたくしたちは、負債——事業を有利に統行する資金の欠乏——ファランステリーの要求、いいかえれば、ファランステリーを完成するためのおかねのために、とほうにくれています。知識の欠乏から、わたくしたちは、わたくしたちがもっていた、いくらかの有利な点によって、利益をあげること、しくじりました。そして、それから、ブリスベーンは、あやふやでふたしかです。かれがわたくしたちに



約束した援助は、かれの尽力からは、もたらされませんでした。——かえって、逆に、かれと、ニューヨークにいるこの主義のための友人たちとは、かれらが約束したとおりに、ブルック・ファームに総力を結集することは、しないで、たちさり——一〇万ドルあつめて、あたらしく発足する、という、一大計画を、とりあげ、このようにして、わたくしたちを、てっとりばやく、かたづけ、——いってみれば、わたくしたちを、ふみだいに、しようとし、そして、わたくしたちのところにきたはずの資金<sup>カネ</sup>を、他へそらします。それで、わたくしたちに、なにが、のこっていますか？　そして、わたくしたちの希望は、どこに、ありますか？　わたくし、もうしあげますわ。わたくしたちは、ニューヨークの友人たちから独立しなければなりません。そして、わたくしたちの立場をかれらに対して防衛しなければなりません。そして、わたくしたちは、できれば、つづけてゆき、そして、完全なアッソシエーションを実現することはできなくとも、（神のおほしめしの）<sup>サムソン</sup>なにもか<sup>グ</sup>に到達する決意でいるということを、かれらをして、しらしめなければなりません。それから、わたくしたちは、おかねをくめ、しなければなりません——わたくしたちは、春までに、すくなくとも、一万ドルいます。でなければ、死んだ方がよろしいわ！　おかねがなくては、わたくしたち、なにでもできませんわ。どうすれば、おかねが、できるでしょうか？……<sup>6)</sup>

でも、まだ、マリアンヌ嬢ただひとりのことばだけでは不十分だ、と、いうひともある。そこで、わたくしは、さらに、いまひとりのひとのみるところを、ここに、かかげよう。それは、一八四六年一月二八日、E・P・グラント(E. P. Grant)というひとが、ピッツブルのジェームス・D・ソーンブルグ(James D. Thornbourg, Pittsburgh, Pa.)というひとにかいた書信の一節にみられるところのものである。そこには、こうのべられてゐる。

……わたくしは、ブルック・ファームに二・三週間滞在した後で、あなたに手紙をかく、と、いう約束を、わすれたわけでは、ありません。その約束をしたときには、ほんとうに、約束を履行するつもりでした。しかしながら、そこを視察した後、わたく

しは、かれらのみこみや、アッソシエーションのみこみに、非常に失望落胆いたしました。そのために、その問題についてかく気が、なくなつたのです。わたくしは、そこに、完全を期待はいたしませんでした。——それどころか、反対に、わたくしは、はなはだ不完全な上に、資力がとほしいことを、予期してしました。——しかるに、様相は、わたくしの予期以上に不満足なものでした。それが、あまりに大きかったので、わたくしは、まったく、落胆いたしました。わたくしの意気の沮喪は、かくも多くの・ゆかしい・熱心なひとびと (so many interesting and devoted people) が、はたらいで、かくも小さいさい目的のために、身をささげていることを、おもうとき、いっそう大きくなりました。

わたくしは、十月の中旬以来、ブルック・ファームに来ておりませんし、また、特別の報告も、うけとっておりません (not heard from there except in general way)。かれらは、かれらのなかに天然痘が発生して、憫をかうむり、そして、食料・衣料、および、燃料については、これらの必要品を豊富にまかなう資力が欠乏しているために、非常な耐乏生活を余儀なくされた、ときかされました。実際、かれらの産業上の活動は、あいかわらず、bare and empty のどくなほど生産性がひくく、収益性が小 (miserably unproductive and unprofitable) で、そして、これが、これまで維持されてきたのは、主として、その学校・寄宿者・一時的な滞在者、および、そのたぐいの収入源によつてです。ハルビンガー (Harringer) の出版は、現在、よい収益をあげはじめている、と、いうことです。しかしながら、このような基礎の上にたつアッソシエーションが、たいしたものになることは、けつして、できません——とにかく、このことは、真の意味でのアッソシエーション (an Association in the true sense of that word) であることは、できません。ファランクスは、その成功の最低形態であっても、それに到達することができたためには、そのまえに、まず、みずからの産業 (the manual industry) によつて、自立しなければなりません。

こうみてくると、ブルック・ファームはファランジュ化したが、そうすることによつて、所期の目的を達成する

ことに成功したとは、おもわれない。いな、むしろ、その逆であつた、とみなければ、ならない。それどころか、むしろ、すくなくとも、わたぐしは、むしろやむを得ざるもので、ある。

- (1) "Notice to the Second Edition of the Constitution of the Brook Farm Association," *the Phalanx*, Volume I, Number 20 (Monday, December 9, 1844), p. 305. (to be found in p. 123 of *Autobiography of Brook Farm* edited by Henry W. Sams, Englewood Cliffs, N. J., Prentice-Hall, Inc., 1958.)
- (2) Everett Webber, *Escape to Utopia, The Communal Movement in America*, Hasting House Publishers, New York 22, 1959, p. 191.
- (3) Arthur Sumner, "A Boy's Recollections of Brook Farm," *New England Magazine*, X, New Series (March-August, 1894), p. 310, (to be found in p. 239 of *Autobiography of Brook Farm*, edited by Henry W. Sams, mentioned above.)
- (4) Henry W. Sams, *ibid.*, p. 118.
- (5) Marianne Dwight, *Letters from Brook Farm 1844-1847*, edited by Amy L. Reed (Poughkeepsie, N. Y.: Vassar College, 1928), p. 41.
- (6) *ibid.*, pp. 136-137.
- (7) Henry W. Sams, *ibid.*, pp. 161-162.

## 九

ブルック・ファームは、財政面に、なやみが、あつた。それは、産業面の不振に起因する。そこで、その拡大強化はかれた。そして、それは、フリーエリズムの採用となつて、あらわれた。かくて、ブルック・ファームはフアラシジエ化した。しかしながら、その成果は、かならずしも、所期するがごときもので、なかつた。それでは、ブルック・ファームのなやみは解消しないわけである。いきおい、その前途は、くらしいものでなければならぬ。

ところが、たださえ、くらい、その前途を、さらに、いつそう、くらくする事情を、われわれは、ブルック・ファームにおいて、みねばならぬこととなる。その事情というのは、このころブルック・ファームをみまった、あいづぐ災禍である。それでは、その災禍はいかなるものであつたか。われわれをして、しばらく、それについて、うかがうところ、あらしめよ。

まず、一八四五年十一月、天然痘がブルック・ファームに発生するをみる。それは、いうまでもなく、ひとびとを恐怖のふちにおとし入れた。十一月九日附の、マリアンヌ嬢がアンナ・パースンズにかきおくつた手紙は、よく、その状態をあきらかにするように、おもわれる。だから、それを、ここに引く。つぎのごとくである。

……ファンニー(Fanny 訳者注、Fanny Dwight)とわたくしは、いま、わたくしたちのへやに、とちこもっています。……わたくしは、かわいいフレッド・アレン(Fred Allen)のほかに、天然痘にかかったものがあるのをしりません。(そして、かれの場合は軽微でした)。しかし、予防手段として、コッチュジをあけて、(その住人は、わたくしたちの融通のきくビルグリム・ハウスに収容)病院とし、フレッドは、つきそい、および、ちちおやといっしょに、そこへ、おくられました。ちちおやは、かるい仮痘(varioid)しかぜです。そのどちらであるか、わたくしは、しりません。オスボーン(Osborne 訳者注、Osborne Macanille)は、看護人として、そこに、とちこめられています。また、徴候のある男性が二人、これに加わっています。ファンニーは、この三日の間、むかしのかぜを、ぶりかえして、います。そして一昨日は、まったく、病氣でした。——今日は、すっかり、よくなり、ただ、すこし、頭痛があり、憔悴している、だけです。それなのに、アメリカとファンニー・マツタ(Ameria and Fanny Mae)は、いっしょになって、みんなを、おびえさせ、仮痘だと、おもわせました。ばかばかしいいたら、ありませんとよ。(It's the greatest absurdity in the world)。そんなぐあいでは、けさ、執政官は、ファンニーをコッチュジに行かす、と、いって、ききませんの。わたくしは、かれに、いってやりましたわ。いけません。——わたくしは、わ

たくしの良識コジツシキを放棄して衆愚に屈服はしません、と。かれは、ファンニー・マックが、ファンニーはその病氣にかかつており、アメリカが、とても、おびえている、と、いつている、と、いいました。わたくしは、いつてやりましたの。ファンニー・マックは、それについては、なにも、しつてはいません、わたくしは、このことについて、かの女のいうことなど、すこしも、おもんじません、そして、わたくしたちは、ファンニーの状態を、とても、よく、しつていますから、どなたか医者のかたが、かの女に徴候がある、と、いわれるので、ないかぎり、かの女を、伝染のおそれのあるところにおくる危険を、おかつつもりは、ありません、と。わたくしは、かれに、それはばかしいことであり、たわけたことであり、理にあわぬことであること、わたくしの正義感をかくのごとき迷妄に屈従させることは、わたくしには、たえがたいところである、と、いうこと、もし、かの女に徴候があれば、かの女は、よろこんで、行くであろうが、わたくしは、少女たちのたれをも、信頼しない、そのわけは、わたくしは、かの女たちは、このことについて、はなはだ無知である、と、おもうから、と、いうことを、はなしました。ついに、かれは、かの女はコッテッジに行かぬ方がよい、と、かんがえました。ですが、わたくしは、わたくし自身も、かの女も、ともに、みんなからはなれて、終日、わたくしのへやに、とちこもつて、あすながおこるかを、みなければなりません。わたくしは、もちろん、これが、おなじく、ばからしい、たわけた、ことである、と、いつて、かれに、ひとびとの恐慌をしづめるために、食事のためにおきており、みんなのなにかまじりは、しない、と、もうしました。……ああ！ わたくしは、リブレイ氏には、いつそう、いちわるく、つらく、あたりました。それというのも、わたくしは、この恐慌が、ファンニーの場合には、でつちあげられた恐怖(a got up fear)であつて、自然のものではない、ことを、しつているからです。でも、ちよつと、たのしい一日でしたわ。いくたりかのひとが、交通遮断にもかかわらず、たずねてみえますの。そこで、わたくしは、ファランステリーの廊下をあゆまねばなりません。わたくしは、おはりしごとをしたり、本をよんだり、いたしましたわ。ファンニーは、きげんがよく、わたくしたちは、道化し、ばいや、茶番狂言と、おもわれるほどに、うち興じたことでした。わたくしは、この病氣が、ここで、これ以上ひろがるとは、おもいません。かぜのひとは、たくさん、います。ちちも、まったく、ひどい、かぜです。コッ

テッジが、そのようになやんでいるひとたちで、いっぱいなことだけは、しています。……わたくし、今日は、ほんとうに、とりみだしましたわ。——ほんとんど、気がくるいそうです。(ジョン・チーバー(John Cheever)のように)、それというもの、ほかのひとたちが、くるってしまったからです。でも、わたくしは、かれらを、ここから、ゆるします。どこまでも、かわることなく、友情をもちます。そして、したいひとたちのなかのたれから、い、ち、わ、る、をうけても、それから生ずることも、じ、み、た、な、や、み、は、できるだけ、おさえます。ほんとうですわ。……<sup>1)</sup>

この手紙は、天然痘発生直後に、かかれたものである。だから、患者は、フレッドただ、ひとり、といっているわけである。患者はその後にいたり、フレッドのほかにも、いくたりも出た。当然、ひとびとは恐怖に支配された。しかしながら、この天然痘のさ、わ、ぎ、は、ひとり、ひとびとを恐怖のふ、ち、におとし入れた、と、いうだけに、とどまらなかった。それは、さらに、財政面に、わるい影響を、およぼさないでは、おかない。それは、みやすいところで、なければならぬ。げんに、われわれは、マリアンヌ・ドワイト嬢が、一八四五年一月、前掲の手紙より後のある火曜日の晩に、フランク・ドワイト氏へしたためた手紙のなかに、木曜日の午前、さらにつけたして、こう、いうて、いるのを、よむことができる。

……このようなときは、ここには、これまで、けっして、ありませんでした。——財政面において、それは、わたくしたちに  
とって、一大損失でなければなりません。<sup>2)</sup>……

そして、ここに、財政面の一大損失というとき、かの女の意味するものは、医療上の出費であろう。おそらく、それ以上のものを意味しは、しなかつたであろう。これが、かかれた時期からすれば、そうかんがえて、よいであろう。しかしながら財政上の損失は、実は、それだけには、とどまらなかつたのである。それ以上の重大なものを

ふくんでいたのである。われわれは、それを、みおとしてはならない。けだし、子弟をここに托して学業をうけさせていた父兄たちのなかには、その子弟をつれかえるものが続出することになる。それは数のまぬがれざるところでなければならぬ。かくて、「学校はがらあきとなり……「一時」閉鎖された。再開をみたのは、最年少の学級<sup>グラデ</sup>だけであつた<sup>3)</sup>」と、いわれる。そして、そのことは、ブルック・ファームにとっては、一大危局でなければならぬ。そのことは、ブルック・ファームの財政収入が、いかに、学校経営に負うところ大なるものがあつたかをしるわれわれにとっては、あらためてのべるまでもないところであらう。ひとによつては、これをもって、のちにのべるフ랑스ステリーの火災と合わせて、ブルック・ファーム解体の重要な原因とみるものさえ、あるくらいである<sup>4)</sup>。しかしながら、この天然痘<sup>5)</sup>は、一月一二日ころには、終熄したようである。マリアンヌ嬢は、その日附で、アンナ・パースンズに手紙をかいている。そのなかで、かの女は、こういつている。

……わたくしたちの病氣は、まったく終熄したようです。(Our sickness seems to be all over.)<sup>5)</sup>

だが、ブルック・ファームをみまう災害は、これだけには、とどまらなかつた。天はさらに、ブルック・ファームに試練をくだしている。祝融氏の来訪が、すなわち、それである。われわれは、まず、ピルグリム・ハウスが、ついで、アイリーが、この、このましからぬ来客を、むかえる役割を、ひきうけるのを、みることとなる。<sup>6)</sup>

(1) Marianne Dwight, *ibid.*, pp. 126-128.

(2) *ibid.*, p. 132.

(3) Everett Weber, *ibid.*, p. 191.

(4) *ibid.*, p. 192.

- (5) Marianne Dwight, *ibid.*, p. 142.  
(6) Everett Weber, *ibid.*, p. 191.

十

こうみてくると、それらの困難にもかかわらず、ブルック・ファームが、維持・運営せられたことは、むしろ、賞讃にあたひする、と、いわねばならないであろう。それでは、どうして、それが、できたのであろうか。そのよつてきたるところをもとめるとき、われわれは、なんといつても、まず、メンバーの熱意を指摘しなければならぬであろう。もちろん、このさい、学校経営乃至ハルビンガー紙よりあがる収益を無視することはできないであろう。それは、いうまでもないところである。けだし、それがなければ、いくら熱意があつたところで、ブルック・ファームは、一日も、その存在を維持し得ないであろうからである。しかし、メンバーの情熱がなければ、たとい、学校経営乃至ハルビンガー紙の収益があつたとしても、ブルック・ファームが、その困難な事情に耐えて、存続しうることは、たれにも、かんがえられないところであろう。すくなくとも、わたくしには、それは、かんがえられないところである。それほど、かれら、ブルック・ファーマーズの熱意は強烈なものであつた。うたがうひとは、一八四五年二月二日、例のマリアンヌ嬢がアンナ・パースンズによせた書信の、つぎの一節をみよ。

……わたくしたちは、ここで、死んでは、いません。生きています。——わたくしたちの精神は堅実、わたくしたちの意気は旺盛、そして、わたくしたちの手は、活動のために、はりきっています。わたくしたちは、水曜日晩に、アッソシエーションの、もつともたのしい、つどいを、もちました。出席したものは、いずれも、かたい決意を、いだいていました。そして、わた



くしたちは、ブルック・ファームを成功にみちびくであろう、また、みちびかずにはおかまい、と、いう、自信に、みちみちて、いました。たれひとりとして、ひとことだって、落胆のことばを、くちにするものは、いませんでした。——わたくしたちの最善の努力をつくして、手をにぎりあつて、すすんで行くことのほかは、なんらのかんがえも、ありませんでした。——あつたものは、ただひとつのハート、ただひとつのソール、ただひとつの意見だけ、そして、そのような結合からうまれる力と希望。そして、それでも、わたくしたちのたゞは、その最悪の様相において、綿密・率直に検討されました。わたくしたちの成功をあやむ議論も、とりあげられ、検討されました。それらの議論は、わたくしたちが、いだいてゐる、偉大な目的と、比較いたしますと、いかに小さく、かつ、とるにたらぬものに、おもわれましたことでしょう。そのような議論の影響をうけることは、大義への叛逆である、と、わたくしたちには、おもわれました。ここにゐる男女は、ひとりだって、（大義にとって、なんらかの価値あるひとは）、このさい、ブルック・ファームをたちさる、とは、わたくしには、信じられません……<sup>1)</sup>

それでは、このような熱意はどこからくるのであろうか。およそ、熱意は、ときに、論理を超越する。もと個性に由来するところ大なるものがある。すでに、ここにあつまるほどのひとびとは、そのような熱意のもちぬしである。そうかんがえて、よいであらう。だから、困難にひるまなかつたのである。だから、逆境にたじろがなかつたのである。そういふぬこともないかもしれない。いな、そういうほか、しかたが、ないのかもしれない。そして、そう、いつてしまえば、それだけである。もはや、なにをかいわんや、である。だが、しかしながら、いくら、熱意は、個性に由来し、論理を超越する、と、いつても、なお、そこに、そのよつてきたところのなんらかの根拠があつてはならない、と、いうことは、あるまい。その支援となるものがあつてはならない、と、いうことは、あるまい。そう、かんがえることが、ゆるされぬところで、なければならぬ、と、いうわけのものでは、ないであらう。それならば、この場合、そのようなものが、はたして、あつたであらうか。あつたとすれば、それは、いかな

るものであったであらうか。そう、たずねることも、ゆるされて、よからう。いな、そうかんがえて、しかるべきで、あろう。そこで、そう、たずねるとき、わたくしは、すくなくとも、わたくしは、そのようなものとして、三つのものを、あげることが、できる、と、おもう。それでは、その二つのものとは、いかなるものか。

まず、第一は、フリーリズムの魅力のつよいということ、である。だが、それについて、くわしく、のべることは、いたずらに論議を本題より逸脱せしめるおそれなしとしない。すくなくとも、ここは、その場所として適當ではない。だから、それについては、ただ、その魅力に強いものがあるということを指摘するだけにとどめたい。

第二は、つぎの事情である。すなわち、ブルック・ファームは、当時アメリカに澎湃としてみなぎってきたフリーエリストの思潮に、まきこまれた。そして、ブルック・ファームは、その実験において、もつとも優秀なものであった。当然の帰結として、そのリーダーシップをとることがみとめられる位置にあった。だから、それとめられた。かくて、ブルック・ファームはその全米ユニオン Friends of Association の本拠の観を呈するにいたった。いな、本拠であった、と、いつて、さしつかえないであらう。いきおい、ブルック・ファームでは、フリーリズムの宣伝のしごとが、活潑におこなわれることとなるのを見る。一八四五年五月には、これまで、フリーリズムの本拠であったニューヨークで発行せられていた、その機関誌の「ファランクス」誌 ("Phalanx") は、「ハルビンガー」 ("Harbinger") と改名して、ブルック・ファームより発行せられることが声明せられ、同年六月一四日、その創刊号が出る。こうして、宣伝活動はいよいよ本格的となる。そして、このとき以後、ブルック・ファームの主たる機能はプロパガンディズムにあったとさえ、いわれるにいたっている。そして、そのプロパガンダは、ひとり、右のハルビンガーによるのみに、とどまらなかった。講師も各地に派遣せられている。そして、

それが、フリーエリズムの大義のプロバガンダにあることは、いなまない。が、同時に、それが、資金獲得を意図したものであったことも、否定できないところである。必要とあらば、わたくしは、それを立証する資料を呈出するに、ことかかぬものである。しかし、それは、あまりに、わずらわしい。だから、ここでは、それを、さしひかえる、ことを、ゆるされたい。もつとも、資金の獲得の成績は、あまり、かんばしいものでは、なかつたようである。それはともかく、かくのごとく、ブルック・ファームの主要の機能が、プロバガンダにある、と、いわれるごとき、アトモスフェアのなかにあつては、ひとびとの熱意が、層一層、強烈となるであらう、ことは、勢の自然、理の当然と、いふべきところで、あらう。なんら、あやしむをちいぬところで、なければならぬ。そう、いつて、よいであらう。

しかしながら、それにしても、そのことも、また、かならずしも、ひとり、ブルック・ファームだけのこととは、いえないかもしれない。他のフランクスについても、おなじことが、いつて、いえないわけでは、あるまい。所詮、それは、程度の差に、すぎない。そう、いつて、いえぬことも、あるまい。だが、それにしても、ブルック・ファームにおいて、ひとびとの熱意のよりどころ、そのささえとなったものとして、われわれは、さらに、いまひとつのものをあげることができる。それが、すなわち、ここに、第三にあげようとするところのものである。そして、それは、ほかでもない。フランクステリーの建設である。

そもそも、フリーエリズムの実践において、その中心をなすものは、フランクステリーである。それは、ここに、あらためてのべるべく、あまりに、周知のことに属するであらう。したがつて、ブルック・ファームにおいても、それがフリーエリズムをとりいれ、フランクジュ化するにいたれば、その建設にのり出すに、なんらふしぎはない。

はずである。いな、そうしないとすれば、それこそ、ふしぎというべきで、あろう。だから、ブルック・ファームにおいても、その建設が意図され、着手された。そのことは、さきに引いた、新規約第二版の前文によって、すでにわれわれのしるところのごとくである。では、その結構は、いかにあったか。しばらく、リブレイの記するところを引けば、つぎのごとくである。

……それは、ながさ、一七五フィート、屋根裏部屋<sup>ア</sup>のついた三階建ての木造。屋根裏部屋はひろくて、独身者のための快適・便宜な室にしきられていた。二階と三階は一四軒にしきられていた。いずれも、独立しており、一つのパーラーと三つの寢室をそなえ、各階とも、はしからはしまでとおうっている縁側<sup>ベランダ</sup> (piazza) で、連結されていた。一階には、ひろくて便利な厨房・三〇〇人から四〇〇人までを収容できる食堂・共同のサルーン<sup>ダイニング</sup>が二つ、および、ひろいホール<sup>ベニメット</sup>講堂室<sup>シアター</sup>が一つ、あった。フアランステリー、あるいは、フアランスの共同建物、のモデルとまでは、けっして、ゆかない。しかしながら、われわれの現在の目的には、よくなっていた。快適な高台を占め、眺望絶佳、協和 (Combined Order) に利便を供し、幾多の点において、きむずかしやをも満足せしめるものであった。……<sup>3)</sup>

かくて、これが完成のあかつきには、当時、ブルック・ファームにあつては、「他の家屋が、ひとでいっばいのために、分散をよぎなくされていた大家族が、独立の家族生活を保証され、また、従来の家屋の室で、住居以外の目的のために使用されていたものが、その本来の用途のために利用されることにも、なる<sup>4)</sup>」と、期待されたのも、うなずけるところである。そして、これが完成すれば、ブルック・ファームは、いよいよ、フアランスとしての軌道にのる、と、かんがえられた。それに、ふしぎは、ない。だから、ひとびとが、それにかける期待は、大きかった。それに托する希望は、大きかった。それだけに、それがブルック・ファームにおけるひとびとの熱意のより

どころ、ささ、えとして、いかに大なる役割をはたしたかは、それこそ、おもいなかばにすぎるものがある、と、いっても、かならずしも、いいすぎとは、ならないであろう。それなればこそ、ブルック・ファーマーズは、困難にめげなかつたのである。災禍にもひるまなかつたのである。どこまでも、熱意をうしなわなかつたのである。そうみてよいであろう。すくなくとも、わたくしは、そうみるものである。

- (1) Marianne Dwight, *ibid.*, p. 139-140.
- (2) John Humphrey Noyes, *History of American Socialism*, Philadelphia: J. B. Lippincott & Co., 1870, pp. 529, 537.
- (3) Henry W. Sams, *ibid.*, pp. 172-173.
- (4) Lindsay Swift, *Brook Farm, Its Members, Scholars, and Visitors*, New York: The Macmillan Company, 1900, pp. 35-36.

## 十一

ブルック・ファームはフフランジュ化した。しかし、その成果は、あまりかんばしいものでなかつた。かててくわえて、災害が、くびすを接しておとつれた。しかし、ブルック・ファーマーズは、それに屈しなかつた。ひるまなかつた。かれらは将来に希望をいだいた。それは、かれらの熱意のたまものと、いえる。そして、その熱意のよ、りどころ、ささ、えとして大きな役割をはたしたものは、フランステリーの完成であつた。それだけに、かれらが、それによせる期待は小さくなかつた。それに托する希望は大きかつた。それは、われわれの、すでに、みたところのごとくである。だが、それだけに、いま、もし、それが消滅すれば、どうなるであろうか？ それがかれらにあたる打撃はいかに大なるものであらうか。それこそ、おもいなかばにすぎる、と、いっても、いいすぎには、な

らないであろう。ところが、それが実際におこつたのである。一八四六年、春まだあさき三月三日、木曜日の晩、フアンステリーは、祝融氏のみまうところとなり、忽焉として地上からそのすがたをけしてしまつたのである。その模様についてはリブレイの公表、マリアンヌの手紙等にくわしくしるされている<sup>1)</sup>。しかし、わたくしは、いま、それを、ここにかかざる余白なきをかなしむ。ちなみに、発火の原因は、リブレイのいうところによれば、ストーブの欠陥である。しかし、ブルック・ファームにここよりかぬものがあつた(近傍の農民の放火であるとのうわさもあつた。しかし、わたくしは、いま、その、究明にいりこむ、いとまはない。いづれにしても、フアンステリーはきえさつたのである。と、いうことは、ブルック・ファーマーズの熱意のよりどころ・ささえが一夜にして、くずれさつた、ということである。その後、なにがくるか。いわずしてあきらかであろう。失望・落胆・悲痛・困惑。そのほかに、なにがかんがえられよう。もつとも、かれらのあるものは、これにも屈しなかつたようにみえる。前後策のために、しばしば会議がもたれた。再建築が熱心に討究せられた。それは事実である。それらの詳細についても、いま、わたくしは、それをつたえいとまなきを、かなしまねばならない。しかしながら、フアンステリーの焼失が、ブルック・ファーマーズにあたえた精神的・財政的の打撃はあまりにも大きかつた。かれらにとつて、それは、あまりにも、大きい、いたでであつた。かれらは、ついに、このいたでより回復することが、できなかつた。<sup>2)</sup>かくて、メンバーの多くは四散した。少数のひとが、なお、ふみとどまつた。それは、事実である。しかしながら、それは、ながく、つづかなかつた。そして、ついに、ブルック・ファームの最後の日がきた。一八四九年の春三月一三日、ナサニエル・ホーソンが、かれのブルック・ファームの日記に最初の記入をした日よりかぞえて、まさに、八年目、この日、理事が残務を整理した。かくて、ブルック・ファームは、終焉を告げた。<sup>3)</sup>

- (1) Henry W. Sams, *ibid.*, pp. 171-172, Marianne Dwight, *ibid.*, pp. 145-149.
- (2) John Humphrey Noyes, *ibid.*, p. 558.
- (3) Everett Weber, *ibid.*, p. 192.

## 十二

以上、わたくしは、ブルック・ファームの生成・推移、および消滅について、いささか、うかがうところがあった。それは、まことに、ささやかなところみである。でも、それによつて、ブルック・ファームのいかなるものであるかは、ほぼ、あきらかになるかと、おもう。そこで、いまや、わたしにのこされたしごと<sup>1)</sup>は、ただ、その解体の原因を究明することだけであろう。しかるに解体の原因は、ブルック・ファームにのみみられる特殊なものと、ひろくユートピアに共通する普遍的なものにわかれる。しかるに、前者は、すでにみたところよりして、これをうかがうことができるであろう。したがつて、わたくしは、これが究明を讀者にゆだねることにより、蛇足のそしりをまぬがれるをもつて、賢明なりと思惟する。そして、後者は、重大にして興味ある問題で、したがつて、従来論議せられるところ、かならずしも、すくなしとせず、わたくし自身においても、すこしく、みずからかんがえるところが、ないでもない<sup>1)</sup>。だが、そのことは、それをして、それ自体として、あらためて、とりあげられることを要請せしめるであらう。だから、わたくしは、その究明を他日に期するをもつて適當と思惟する。すなわち、わたくしは、ここに、わたくしのブルック・ファームの筆を擱く。

(1962, 7. 5. a. m. 11:30)